

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 水無瀬 翔   |
| 学位の種類   | 博士 (美術)   |
| 学位記番号   | 第108号   |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当  |
| 論文題目    | 弱い技法<br>問いを誘発するメディア=アート                                       |
| 審査委員    | 主査 教授 高橋 悟<br>教授 加須屋 明子<br>教授 小山田 徹<br>准教授 佐藤 知久<br>准教授 石橋 義正 |

## 論文の要旨

本研究は「弱さ」の研究である。弱さとは例えば、脆弱さ、負けてしまうもの、消えやすいもの、私的なこと、不安定さ、曖昧さ、少数派、障害者、性的マイノリティー、中途半端さ、ケアの必要なもの、などが挙げられる。

本論文では、少数派の現場で積み上げられた研究を「弱さ」を考えるうえで、とくに重要な参照点として理論的な要にしている。しかしながら、筆者の「弱さ」への関心は、理論的というよりも経験的、個人的な経験にはじまっている。

それは祖父のこと、亡くなった祖父にまつわる記憶である。祖父は私が生まれる一年前に交通事故に遭い、下半身不随と脳損傷による知的障害を負った。そしてそれから亡くなるまでの約30年間、ベッドの上で人生を過ごした。祖父の、声にならない声で童謡を歌ったり、タスケテクレ、タスケテクレ、とベッドの上からあげる声、まるで壊れたロボットのように数個のプログラムされた動作を繰り返す様子が今でも脳裏に焼き付いている。祖父は障害を負って以降、基本的には障害者施設で暮らしていた。私が幼い頃は私たち家族で出向くことも多く、施設で開催される催しに参加することもあった。そのなかで最も印象に残っているのは、運動会である。その運動会では施設の入居者や職員、そして親類が合同で参加するのだが、入居者はそれぞれ抱えている障害が異なり、競争を成り立たせる範例的身体が存在せず、能力を順位づける競争は機能しない。それが単に競争原理にもとづかない運動会という意味的な面白さだけではなく、そこに集う人間たちが、目に見えて共約不可能なばらばらで意味をなさない集合であることの空気感自体が居心地のよいものだった。

そのような施設に入居している祖父の里帰りのため、一年に数回迎えに行くのが私たち家族の役目だった。京都北部の故郷（私の父の出身地でもある）は典型的な過疎地域であり、いわゆる田舎である。その数日間祖父の面倒を見るため、父の妹家族が住んでいるかつての実家に祖父の子供達家

族が集まり、面倒を見る。それはご飯をたべさせる、服を着替えさせる、オムツを替える、お風呂に入れるなど、何もできない赤ん坊の面倒を見ることとほとんど同じケアをするのだ。赤ん坊は泣き叫ぶことによって自身の不快感を示すが、祖父の場合は暴力を振るう。もともと事故に遭う前はひどい家庭内暴力を振るっていたらしい。しばしば離婚の話が出ていたらしく、事故当日も祖母が耐えきれず離婚を告げたところ、原付で家を飛び出しトラックにはねられたと私の叔母（父の妹）は言っていた。だから、このような履歴を持つ祖父のケアをすることは、その子供たちや、妻である私の祖母にとってはある意味で調和的なケアとは程遠い、葛藤や軋轢を抱えた心境があったように思う。たんにこうした履歴をもつだけではなく、実際のケアの場面においても、暴力は日常的に生じていた。幼い子供であった私もケアを手伝っている最中に殴られることがしばしばあった。私自身が経験したものはケアの一部であったものの、いわゆるケアとして想定される保護されるべき弱者を隅々までサポートするようなものではない。そしてまた基本的には施設で面倒をみてもらっていたので十全なケアとはいえないだろう。部分的なケアでしかないケア。だとしたらこのような「ケア未満」のケアをケアの具体的事例として語ることはできるのだろうか。語ることができる、と私は考える。そしてこのような「ケア未満」のケアについて個別具体的な語りが生まれていくことが、当事者問題として語られ他人事として理解されがちなケアを、アクセスすることがややもすると閉ざされがちな事態を、私たちの問題として共有するために必要な行為であると考えている。つまりケアはけっして当事者問題として処理されがちな「私的」な問題ではなく、きわめて「公的」であるがゆえに「政治的」な概念である。

第1部では、そうした「私的」な問題として他者がアクセスする経路が閉ざされてしまいがちな「弱さ」をすくい上げアクセス可能にするための方法論について考えたい。前半部（1章）では、少数派の現場で語られる議論・研究について参照し、弱さが可視化される試みがいかにしてなされているのかを見ていきたい。参照するのは、フェミニズムの公私二元論批判、当事者研究の「問う」営み、そしてゲイ・スタディーズの境界事例である。これら少数派の現場から生み出される理論から、本研究において着目する「弱さ」が通俗的な「弱さ」のイメージとは別種のものであることを明確にし、技法としての「弱さ」を考えてみたい。後半部（2章）では、組織構造の逆機能というべき問題が、少数派の現場にとどまらず、社会システムのレベルでも見出されることに注目したい。本論文では現代社会のあらゆるところに見出される官僚的組織構造を持つものの中で、自身の表現手段とかかわるメディア環境の問題に焦点を当てる。環境管理型権力およびフィルター・バブルにおける問題、つまり「囲まれた世界」から抜け出す方法について考える。前半部で注目した「弱い技法」を境界性、無目的、遊びという概念と結びつけ、「囲まれた世界」からの抜け穴として解釈し、第2部の議論に接続する。

第2部では、前半部（1章、2章、3章）で自身の作品を含む境界的で虚構的な作品事例をとりあげる。これらは虚構を用いて対抗的な現実をつくることを志向している。境界的であるというのは、安直にボーダレス世界を夢見るのではなく、差別（非対称な分割線）などないという言説へ対抗的な視点を有するということである。虚構的というのは、少数派の現場で生まれる技法を別の角度から見たときの「弱い技法」である。後半部（4章）では、これら境界的で虚構的な特徴を有する対抗的な現実の実践に連なるものとして、自作のロボットのデモ行進《Demonstration》について説明する。

第3部では、《Demonstration》がライブであり、展示空間での鑑賞という形式に落とし込もうとした時の問題、つまり鑑賞モデルの限界を乗り越えるために、制作した《DEMO DEPO》について説明する。《DEMO DEPO》はお店とワークショップという二つの形式から成っており、それぞれの形式の特性と発生した状況について考察する。

私たちの社会における「弱さ」と呼ばれるものに着目し（第1部）、それら弱い対象を既存の問題設定を揺るがす「問いの誘発装置」としてメディア表現の立場から再解釈し（第2部）、「弱い技法」の可能性を探求する（第3部）。

## 審査結果の要旨

本学博士課程メディア・アート専攻に所属する水無瀬翔は、「既存の社会問題」ではなく「未知の社会性」を芸術実践を通じて切り開く研究制作を続けており、今回は「弱い技法 問いを誘発するメディア＝アート」と題された論文発表と展示を行った。

過去3年に渡り、水無瀬氏はヒトと情報とテクノロジーがブラックボックスとしてではなく、可視化される形で相互に作用する方法を研究しており、具体的な実践としてポーランドの現代美術家との共同ワークショップや、元崇仁小学校での展示などを経た成果発表としてアートアワード・イン・ザ・キューブでの「Demo Depo」プロジェクトを展開した。その活動は「弱いロボット」による公共圏でのデモや、そのロボットのレンタルオフィスを美術館に設営するなど一見、荒唐無稽な内容である。しかしその背後には、小さな個人と大きな社会システムの間で、それらの蝶番として機能することで、人と人との相互行為や批評的思考を促す中間領域としての仮設的なコミュニティの可能性の探求という軸が問題として据えられてきた。

今回の発表では、水無瀬氏は改めて「弱さ」をキーワードとして論考を進め、弱さの可視化、弱さをつくる、弱さの可能性の3章に分けて語りながら、「問いを誘発する装置」としてメディア表現を位置づけ、自身の制作の意義を明確にした。水無瀬氏の発表は、どれほど自律的に見える男性であっても、彼の生を支援するケアがあつてこそ、その仕事に専念できているのだというフェミニズム批評の指摘から、議論を展開している。それは、「自律的でケアを必要としない主体」というあり方を批判するものであり、互いに不足している部分をおぎないあうような複数的主体のあり方を提示することになる。

現代美術が文化的・社会的マイノリティの問題を扱うことはもはや珍しくないし、どのようなマイノリティを扱うかという作家の問題意識に焦点が当てられることも多いが、文化的・社会的な（あるいはそれ以外の、多様な状況と様態にある）「弱さ」全般を、見えるもの・触れうるものにするための方法として「メディア・アート」があるという著者の発想は、斬新であるし、有意義な問題設定であるように思われる。本論文は、こうした著者の問題意識が徐々に成長していくプロセスを、作品の制作プロセスと並行させつつ、記録しまとめたものである。

著者にとって本論は、次の作品を作るために研究を行い、その研究の成果として作品がバージョンアップしていくという、研究と表現の良い関係性を示すものともなっていて、美術作家における研究のあり方のひとつのモデルとも言えるものになっている。初期草稿には、著者がもつさまざまなアイデアが断片的に散りばめられ、まとまりを欠いているようにも思われたが、そうした要素が最終的には「弱い技法」という観点（なんらかの弱者だからこそ持ちうる生きるための技法と、その技法に学びつつさまざまな弱さを可視化していく芸術的技法という二つの意味をもつ）へと収斂し、結果として論文としての内容を保ちつつ、読みやすいものへと整理されたのもすぐれた点である。

とりわけ本論において重要だと思われるのが、鑑賞者（参加者）と作品との関係についてである。マイノリティが編み出した弱い技法に学びつつ、自ら作品をつくる過程で著者が直面したのが、作品が問いを誘発するものであったとしても、鑑賞者一人一人がもつ「弱さ」がその場において語られること＝可視化されることがないのであれば、鑑賞者と作品との関係性は結局変わっていないと

考えざるをえない、という問題だった（もちろん、ギャラリーや美術館を出た後に何かが起きている可能性は否定できないが、それは認識困難である）。

ここから、美術鑑賞という行為の枠内に作品との接触をとどめるのではなく、作品をそれに接する人たちの現実世界に直接リンクさせるにはどうしたらいいのか？という、本論における第二の大きな問い（すぐれてメディア・アートの問い）が生まれる。この問いから再スタートを切ることによって、著者の活動は、店舗型作品へ、その手法を用いたワークショップへと展開し、「社会や周囲への不満を公共の場で訴える」デモンストレーションという枠組みを用いて、作品に触れる人たちの不満という形で出現する「弱さ」を可視化する場所を作ることに成功することになる。

特に、論文提出間際に実施したワークショップ《いろいろ DEMO DEPO》では、障害者支援施設グッドジョブ！センター香芝の協力のもと、それまでのワークショップとは異なる状況において（参加メンバーの多くは、そもそもデモが何を意味するのか理解できないため、日ごろ感じる不満を話してもらい、等の変更を試みざるを得なかった）異なる方法でアプローチを試みた結果、興味深い考察が導かれた。警察署へ提出するデモの申請許可書を書くことができない人びとと行った、このワークショップでは、デモをする権利を事実上奪われた人たちの存在が、「用紙にうまく記入できない」という形で可視化されており、その内容を取り込んだ作品展示も非常に興味深いものとなった。

もちろん、このような形で「弱者」を作品化することについては、倫理的な観点からの批判も予想される。しかし水無瀬氏の場合、ワークショップや店舗型作品に参加することによって参加者の行為がどのように作品に取り込まれるかは、その作品自体が示しているとも言える。その意味で本論は、生存の技法としての「弱い技法」だけでなく、参加者との関係性を作る上での強さや弱さ、つまり研究や表現における「強い技法」と「弱い技法」についても、著者自身は明言していないものの、有意義な示唆を与えるものとなっている。

水無瀬のプレゼンテーションは非常に構成がまとまっていて主旨がわかりやすく、大学会館ホールでの展示についても、映像、サウンド、光、装置の使い方などテクニカルな面も含め、クオリティが高く魅力的なものであった。

Demo Depo という作品の発表形態が、店舗という形をとった相互性やパフォーマンス性のあるものなのか、あるいは今回の審査での展示の様なインスタレーションなのかという疑問が生じたが、水無瀬はこのプロジェクトの発表形態は段階を持ったものであり、成果発表という形のショールーム的な展示もあると示されたことに納得ができた。今後、ワークショップを含んだ様々な店舗出店の方法と展示方法の模索、実践を積み上げていくことによって、このプロジェクトの意義やリアリティがさらに生まれていくものと思われる。社会批判が含まれる作品であるので、積み上げていく際に立ちはだかる様々な困難が予想されるが、それに対して解決していく過程も、このプロジェクトにおいては必要な要素であり、そこからアイロニカルなユーモアも浮き上がってくるものと思われる。「弱い技法」は一般化することができないが、個別の事象とその応答に寄りそうところから、新たな可能性が見いだせる。表現と研究とが一体となった水無瀬氏の手法も誠実な考察と根気強い実践の積みかさねによるところが大きく、合わせて高く評価したい。

以上をもって今回の水無瀬翔の発表を合格とした。